

「マルティン・ニーメラー」

2017年07月18日

日本キリスト教団出版局の月刊誌『信徒の友』の8月号は「遅すぎたと言わないために」を特集し、マルティン・ニーメラーの有名な言葉を冒頭に掲載している。

「ナチが共産主義者を襲ったとき、自分はやや不安になった。けれども結局自分は共産主義者でなかったのも何もしなかった。それからナチは社会主義者を攻撃した。自分の不安はやや増大した。けれども依然として自分は社会主義者ではなかった。そこでやはり何もしなかった。それから学校が、新聞が、ユダヤ人が、というふうに次々と攻撃の手が加わり、そのたびに自分の不安は増したが、なおも何事も行わなかった。さてそれからナチは教会を攻撃した。そこで自分はまさに教会の人間であった。そこで自分は何かをした。しかしそのときはすでに手遅れであった。」(丸山眞男訳)

ニーメラーの言葉を受けて、宮田光雄先生が「今、ニーメラーを読むこと」と題して、寄稿している。宮田先生は、仙台で講義を聞いたY・E姉を通して、横浜港南台教会の特別伝道集会の講演に来てくださった。私は、宮田先生の著作から、多くを教えられてきた。

宮田先生は下記のように書いておられる。ニーメラーは、ナチズムの嵐が吹き荒れる時代に、勇敢な教会闘争をした牧師である。ヒトラーに面と向かって論争し、結果、「特別囚人」として、1937年夏に、ダハウの強制収容所に入れられた。1945年にナチズムは崩壊し、解放されたが、同じ悪夢を幾度も見た。最後の審判に、神の前に呼び出されたヒトラーは、「私には、かつて誰一人として福音を語ってくれませんでした」という驚くべき弁明をしている夢であった。ニーメラーの心の奥深く留まっていた罪責の意識であった。

1945年の秋、ドイツ福音主義教会は、ニーメラーの強い要請に基づき「シュトゥットガルト罪責宣言」を出した。そこには「大きな痛みをもって、われわれは告白する。われわれによって、限りない苦難が多くの諸国民や諸国の上にもたらされたことを」と、侵略戦争を引き起こしたドイツの責任が告白されている。シュトゥットガルト罪責宣言後、夫妻はダハウの強制収容所を訪ねた。死体焼却炉前の粗末な板切れに「238,756人が焼かれた」との短い言葉に、ニーメラーは、「特別囚人となるまでお前はどこにいたのか」と問いかけを覚えた。収容所の外で自由な人間だったニーメラーはナチズムの暴虐な人間否定に注意を向けていなかったことを激しく自責した。それが、上記のニーメラーの言葉である。

宮田先生は、ニーメラーの自責の思いを紹介してから、現在の日本が直面している問題を書いている。安倍政治は「戦後レジームからの脱却」をスローガンにし、憲法改正への志向を強めている。国家機密を強化し、武力を誇示する安保戦略を促進し、テロや東京オリンピックを口実に「共謀罪」を成立させた。憲法九条を「消極的平和主義」と誹謗し、「積極的平和主義」への移行を説いて、戦争のできる国を目指している。「積極的平和」とは従来、自由を実現し、平等、正義を貫徹することを基準にし、立場や皮膚の色、宗教や性の違いを超えて、全ての人が生きる希望を育成する社会の在り方を指している。

森友学園に対する首相夫妻の関与や加計学園への官邸指示を巡る疑惑にも公的資料の開示を拒否し、「大いなる嘘」を繰り返し、権威を誇示している。そして、官僚を恫喝している。立憲主義、議会政治の破壊で、独裁に近いと言わざるを得ない。

人間が互いに依存し合っている現代社会では、自分の意見を持ち、時の政権の政策に賛否を表わす責任がある。「どちらとも言えない」は中立の表明ではなく、政権与党に加担する行為となることを忘れてはならない。ニーメラーが「すでに手遅れであった」と言った重い自責の言葉をいつも念頭に置き、発言し、行動することが求められている。